
戦乱の旋律

神崎 琉璃華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦乱の旋律

【Nコード】

N4386A

【作者名】

神崎 琉璃華

【あらすじ】

7年前の約束、それだけを信じて・・・ 戦乱の世に生きる、琥珀軍の葵桔梗と麟爛軍の遠矢真。2人の過酷な戦いと悲しき恋物語がいま、旋律として奏でられる・・・

序曲 1st・刻まれる旋律

「本当に、いつちゃうの？」

青い瞳をした、小さな少女が問う。少女の前にいる、紫色の瞳をした少年は、黙ってこくりとうなずいた。

「・・・」

少女は目を伏せる。

引き止めたい……

そんな想いでたくさんだった。しかし、引き止めてはいけない。彼が決めたことだから…自分には、止める権利がない。

やがて、少女は顔をあげた。目は赤くはれ、涙が流れている。

「約束、して…」

少女はもっていたネックレスを少年へと差し出す。

「7年…7年だからね」

「…ああ」

少年はそういつて微笑み、少女からネックレスを受け取った。

ネックレスを首にまわし、身につけると少年は少女を見つめた。

「絶対に俺は、あきらめない。だから」

「信じてる。信じてるよ…でも、約束も忘れないで」

涙をこらえながら、必死に笑顔をつくって少女は言う。

そんな少女を見かねて、少年は腰にさげてあった一本の横笛を少女へ差し出した。

「…これ…」

「必ず、取りにくるから。そして、また一緒に吹こう。あの場所で

…」

少年の手にのる、琥珀色に塗られた横笛を少女は手に取った。それは、あまりにも軽くて、でも、笛にこめられた想いは少女が感じ取ることができないほど、重い……
少女は両手で笛を握り締め、少年に向かって精一杯微笑んだ。
「大切に作るから……必ず、また聞かせてね……？」

君の奏でる、旋律を

アルセラ暦 3400年 桜爛国

秘術を用いる西の都“琥珀”

機械のあふれる北の都“麟爛”

いま、この2つの勢力のあいだに

新たな旋律が刻まれる

2人の人間によって……

戦乱と破滅の旋律を……

序曲 2nd・琥珀

桃色の花びらが、風にのって空を舞うこの都：“琥珀”

だいたい、秘められた術とこの都からとれる“鉱石”が都を発展させているものだ。

華の都とも呼ばれる“琥珀”は、長い間、北の都の“麟爛”と戦乱を続けている。

ここの軍の団長、葵あおい 桔梗ききょうは、剣技で名を知れる女性だった。

ただ、彼女には1つ、琥珀の者とは違うものがあつた。

琥珀の人間であるならば、誰もが使える『秘術』が彼女には使えないのだ。

しかし、彼女は己の剣技だけで団長までへの地位を手に入れた…

「桔梗様 ……!!」

真紅の長い髪を2つに結った少女が大声で叫ぶ。

左右に長い髪を2つにまとめ、後ろは短い髪の女性は、真紅の髪の少女の声に振り返った。

蒼い瞳は、じつと少女を見据える。

「…紅那っ」

紅那と呼ばれた少女、紫龍しりゅう 紅那こうなは、にこにこしながら桔梗に言う。

「桔梗様っ！神威さんが探してましたよ？なんか、すっごく怒ってました！」

「…あ…」

桔梗は、ふうつと深くため息をついた。

最近、もの忘れが酷いのだ。（年をとったためではない…と桔梗は否定しているが、本当に酷い）

今日も、予定通りの時間をすっかり忘れていた。

怒らせると、これがまたしつこい。

「…桔梗様？」

紅那は、首をかしげながら桔梗の顔を覗き込むように声をかける。
桔梗ははっとして、顔をあげた。

「あ…ごめん。すぐに行く」

そういって、桔梗は紅那と別れて長い廊下を歩き出す。

そして、これからのことを考えるとまた、深くため息をつくのであった。

「…」

「えつと…あ、いたっ」

桔梗はトコトコと歩いて、ベンチに座る紫色の髪をした青年へ駆け寄る。

青年は、桔梗の姿を見るなりベンチを蹴り上げて立ち上がる。

「これは、ヤバイ」と感じた桔梗は、顔を歪ませた。

「てめえな　　！！！！なあにやっただんだよ！！！！ど

れだけ人を待たせれば、気が済むんだよ！！！！」

「お…抑えて…てか、1時間しか経ってないじゃ…」

「馬鹿野郎っ！！1時間だぞ？！！1時間あれば、なんだってでき

るじゃねえか！！俺は、めっちゃ貴重な1時間を

てめえに潰されたんだぞ？！！」

「まあまあ」

「まあまあじゃねえよ！！てめえがいけねえんだ」

「神威、やめろって」

桔梗と青年、相楽さから 神威かむいの間に緑色の髪の青年がはいった。

緑色の髪の青年は、神威の腕を掴み、微笑んで言う。

「神威さん神威さん、少し落ち着きましょうね？」

「ああっ？！！てめえ、俺より餓鬼のくせに口だしすんじゃないぞ

？！！」

「餓鬼ってのは、認めますけど…ほら、桔梗も何かいって」

緑色の髪の青年は、顔だけを桔梗のほうへ振り返る。

桔梗は顔を歪ませながらも、作り笑顔で言う。

「ごめんね？あ、今度、ケーキ作ってあげる！神威の好きな木苺のケーキ！」

「マジ?!?!」

怒りは一瞬の内に消え、幸せそうな笑顔で神威は言った。

「うんっ！とびっきり甘いクリームも作ってあげるからっ！ね？」

「…よし、今回は許してやるう」

そういつて、神威は乱れた髪を整える。

緑色の髪の青年は、ふうつとため息をつく。

“今回は”といったが、これで100回目だ。神威は、甘いものには目がない。

それでもって、桔梗の作るケーキは絶品だ。神威は、桔梗のケーキには負けてしまう。

「亥緒もごめんね？」

桔梗は、緑色の髪の青年に向かって言う。

緑色の髪の青年、卯月うづき 亥緒いおは、桔梗に向かって優しく微笑んだ。

「いえいえ、いつものことですから」

「…ごめんなさい、いつも忘れて…」

すまなそうに桔梗は言った。

亥緒は慌てて否定する。

「いえ、そういうわけじゃ…」

「クスクスッ」

馬鹿にしたような笑い声が響く。

亥緒はムツとして、声の聞こえるほうへ顔を向ける。

「…功卯？」

「あつははは〜!!!全く、あいかわらず女に弱いんだな、亥緒は!!!」

物陰から、金髪の青年、工藤 功卯が現れた。
亥緒は腰に手を当て、功卯をキリツとにらみつける。

「女に軽いお前よりか、マシだろ」

「軽いわけじゃないって。可愛そうだから、全部相手してやるのさ」
そういつて、功卯はにかつと笑みを浮かべる。

桔梗は、驚いたように功卯を見つめた。

「功卯っ！任務は終わったの？」

「おうっ！楽勝だったぜ！！」

「お疲れ様。流石、功卯ね」

「そういつてくれるのは、団長だけだぜ」

そういつと、功卯は先ほど神威が蹴り飛ばしたベンチを直し、ベンチに腰をかけた。

「“あいつ”なんか、いつつも俺を馬鹿にしてばっかだ」

「あら？そうなの？」

意外そうに桔梗は言う。

「そうだぜ」といつて、功卯はムキになったようにいつ。

「人が予定よりかなり早く任務を終わらせても、“人をコキ使いすぎ”とか“もつと早く終わらせる”とか

と」にかく、酷いんだって！」

「…誰が酷いつて……？」

「っ?!」

功卯は振り返った瞬間、華麗なとび蹴りが功卯の顔面へ直撃する。

功卯は体ごと吹き飛ばされ、地面に転がっていく。

ベンチの上には、華麗なとび蹴りをしたピンクの着物をきた茶髪の少女がいた。

「ひ…姫優理っつっ！！いきなり何すんだよ！！」

「何よっ！功卯が、私の悪口ばっかいうんじゃないの！！」

茶髪の少女、秋菜 姫優理は、功卯を見下すようににらんでいつ。

顔はかなり可愛いのだが、行動が怖い。

桔梗と亥緒と神威は、その場に呆然と立っていたが、亥緒が2人に耳打ちをする。

「これ以上いると、ここは戦場となります…避難しましょう」

「賛成」

「同感だ」

そういつて、3人は、その場に功卯と姫優理を残してさっそうと去っていった。

「…いつも、ああなの？」

桔梗は、亥緒へと問いたずねる。

亥緒は「まあ」とため息交じりで答える。

「長い付き合いだから、ああいう場面はよく見えます」

「とめなくていいのか？」

ソフトクリームを食べながら（どこからもってきたのだろうか？）神威は言う。

「いいんです。無駄な揉め事に首をつっこみたくないんで」

そういつた亥緒の考えは正論だ。

昔から何度も2人をとめたことがある。とめられた事もあるが、それなりに被害を被ることがほとんどだ。

最近は、特に酷い。

以前、2人の揉め事に巻き込まれた亥緒は全治一ヶ月の重傷をおったことがある。

「…ねえ、どつちかこれから時間ある？」

話題をかえようと、桔梗が話を切り出す。

「えつとね…ちよつと、最近体動かしてないから手合わせがしたいな…って思っつて」

「ん？じゃ、俺付き合っつぜ」

にかつと神威が言う。

「うん、お願い。亥緒はどうするの？」

「僕ですか？…念のため、2人のところにいきます」

「そう…怪我しないようにね？」

「御意」

そういって、亥緒は桔梗に軽く会釈をすると歩いてきた道を再び戻っていった。

なんといつても、結局は気になってしまっただ。

桔梗は呆然と立ち、亥緒の背中を見つめる。

「桔梗？」

神威が桔梗の顔を覗き込む。

はっとして桔梗は神威に目を向ける。

「わ…びつくりした…」

「ぼーっとなにしてんだよ。鍛錬所、いくんだろ？」

「うん、いくいく」

そういって、桔梗は神威と鍛錬所へ向かう。

いつもと変わらない生活

でも

でも、何か足りない

あの、7年前から…

序曲 3rd・麟爛（りんらん）

小さな白い粒が空から降り注ぐ北の都、“麟爛”

機械技術が発展する、雪国である。だいたい、西の都“琥珀”と長い戦乱を続けていた。

麟爛の団長、遠矢^{とよや} 真^{まこと}は、14という若さで団長の地位に上り詰めた。

そんな真は、今年で19になる。この年、彼にとって、運命の戦いがはじまる…

「…ハッっ!!」

茶髪で紫色の瞳をもつ青年は、大きな大剣を空気を裂くように切りつける。

大きな大剣を軽々と振るい、風のように青年は動く。

彼の視界に、雪がゆらゆら揺れるように降った。

視界にはいった瞬間、青年は雪を切り裂くように剣をすばやく振るう。

雪は溶けず、あつというまに細かな結晶となる。

《パチパチ》

茶髪で白いマフラーをした女性は小さく拍手をする。

青年は、女性のほうへ顔を受けた。

「あ、美紀ちゃん」

「『美紀ちゃん』じゃないですよ!!こんな寒い日に何してんですか?!」

「何って…訓練。偉くない?」

「ばっかじゃないですか?!風邪ひいたら元もこつもないですよ?」

！」

「俺、風邪引かないし〜」

「どんな根拠をもっていつてるんですか?!」

女性、里見 美紀は、怒りを爆発させて言う。

青年は剣をベルトにさげると、美紀のほうへと歩み寄った。

「そんな顔するなつて。せつかくの可愛い顔が台無しだぜ?」

「お世辞はいりませんから、早く戻ってください!」

「はいはい…あ」

思い立ったように青年は、自分の着ていた上着を脱いだ。

その行動に、美紀は目を丸くする。

「だから、風邪をひかれると困るつて」

「だーから」

青年は、自分の上着を美紀へとかぶせる。

美紀は驚いたように青年を見つめた。

「悪かったな。探させて。風邪、ひくんじゃねーぞ?」

そういつて、青年はたつたと歩いていく。

「…ばか真…」

上着を抱きしめながら、美紀は青年、遠矢 真の背中をじつと見つめた。

「あ、真ちゃん〜!!」

オレンジ色のショートカットの少女が、真に飛びつくように抱きついた。

突然だったので、真は倒れ掛かった。

「ななななにすんだよ!弥生!!」

「へっへ〜ん 驚いてくれた??」

少女、守宮 弥生は微笑んで言う。

「驚きましたよ」

あきれるように真がいうと、真の目の前に1人の青年が通りかかった。

「あ、蒼維つつつ」

「…ん？あ、馬鹿団長」

うすく青みのかかった黒髪の青年、都築 蒼維は真を見て笑みを浮かべた。

真は弥生を振りほどくと、蒼維のほうへ歩み寄った。

「お前、俺の秘蔵めろんぱん食ったろ?!?!」

「っ?!?!なに…なぜに俺だとわかったのだ?!?!」

「髪の毛が落ちてたんだ!こんな髪の色、お前しかいないから…じゃなくて、勝手に食べるんじゃないやねえよ!?!」

「だって、腹減ったから…」

「そういう問題か?!?!」

「…真つつ」

自分を呼ぶ声に、真は目を見開いて声のしたほうへ振り返った。そこには、黒い髪を1つにしばった女性がいた。両目を包帯で巻いている彼女をみて、真はどきっとした。

「…き、祈鎖…」

灯閃 祈鎖は、真のほうへ歩み寄った。

実はというと、真は祈鎖が苦手だ。

理由という理由は特にないのだが、どうにも彼女は苦手だった。

祈鎖は、真の前に立つと

「領主がお前のことを呼んでいた」

ときっぱり、鋭く冷たい声で言った。

「そ…そうか、サンキュ…」

お礼をいうと、祈鎖はさっそうと去っていった。

いま思うと、“これ”が彼女の苦手な理由かもしれない。

彼女は自分のことを人に話そうとはしない。自分から、人と交流しようともしない。むしろ、交流しないようにしているかもしれない。

真はそつとため息をつき、蒼維をにらみつける。

「あとで、代えのめろんぱん、買っとけよ」

《コンコンッ》

「失礼します」

真は重い扉をそつと開けた。

目の前には、暗い部屋があった。この部屋はいつでも暗い。

前に机と椅子がある。椅子に座っているのが、この都の領主である

葉月あきづき 芹せりだ。

真は、祈鎖も苦手だが1番苦手なのが領主だった。

芹はじつと、真を見据えた。

「…お呼びですか？領主…」

「…戦闘命令だ…」

氷のような冷たい声で芹は言う。

そして、机の上にクリップで束ねられた資料があった。

真はその資料をとって、中をさつとみた。そこには、任務の内容と

詳しい説明が記されていた。

そこにあつた、“琥珀軍との戦争”に真は小さく舌打ちをした。

「…どうか、したのか…」

「あ、いえ…琥珀軍との戦闘…容易なものではないな…と」

「そうだ…そして、敵は一人残らず始末するのだ…お主なら、難し

くはないだろう」

「…敵にも、よりますけどね…」

そついつて、真は資料の最後の1枚を見た。

「……」

真は資料をぱらつと床へ落とした。

まさか…そんなはずがない。

彼女が……

「…どうかしたか…？」

芹が聞いた。だした。

はっとして、真は我に帰った。

「いえ、なんでもないです…」

そういつて、床に落ちた資料を真は拾い集めた。

「では、明日から任務を開始します…」

そういつて、真は部屋を出て行った。

「…」

「真？」

眼鏡をかけた青年に、真は目をやった。

「朱薫」

蘭麻 朱薫は、目を丸くして真を見つめた。

「どうかしましたか？ 顔色がよくありませんか…？」

「いや、なんでもない。あ、美紀にこれ、渡してくれるか？」

そういつて、真はさきほどの資料を朱薫へ渡した。

朱薫がパラパラを見ると、顔をしかめた。

「新しい任務ですか？」

「ああ。明日からな。多分、朱薫たちも連れて行く」

「なるほどね。わかりました…では、明日までにはその顔色、戻し

てくださいね」

そういつて、朱薫は真の元を去っていった。

真は、ポケットから1枚の紙を取り出した。

それは、芹から渡された資料の最後の1枚だった。

そこに写っている1人の女性。彼女が…

「…きちまったのか…」

そう呟き、真はその資料を両手で丸めて近くのゴミ箱へ投げ入れた。

資料は、さっとゴミ箱へ入っていった。

「…迷うわけにはいかねえ…俺は、俺の野望を叶えるまでは…」

そういつて、真は長い廊下を歩いていった。

任務遂行条件：琥珀軍の軍力を削減又は団長の抹殺

団長の名前は、葵 桔梗。

4th・やりきれない想い

「指令……」

桔梗はため息をついた。

先ほど、翔から言い渡された指令。琥珀領地内にある、“翡翠の塔”の奪還命令。つまり、翡翠の塔はいま、麟爛のものとなっている。しかし、翡翠の塔では名前のとおり、“翡翠石”という石が採取される。これは、不思議な力を宿し、“秘術”を使うためには必要なものだ。秘術と合わせれば協力的な“武器”となる。

秘術……代々、琥珀にすむものが自分の“気力”を“魔力”へかえて、人間では操ることできない、自然などのさまざまな力を操ることができるのだ。

秘術には種類があり、一般的に『火』『水』『氷』『雷』『風』『空気』などがある。

また、ごくまれに自然以外の力を操ることができる。琥珀軍の中では、団長である桔梗が『時』、副団長の神威が『重力』、そして領主の館へつとめる占い師、輝宮^{かくみや}綾香^{あやか}が『予知』の力を使うことができる。

【1時間前】

「任務ですか……？」

「ああ。翡翠の塔の奪還だ。副官を連れていってくれ」

そういって、翔は地図と軍資金を桔梗へ渡した。

桔梗は納得のいかないような目で、翔を見つめた。

「なぜ、私が出陣しないといけないのですか？ご存知のとおり、私は……」

「承知している。なんせ、相手は麟爛の団長だ」

「団長…？」

桔梗は首をかしげた。

桔梗は、1年前に団長の地位につき、それまでは戦闘には参戦していなかった。

そのため、団長が誰か知らなかった。

「お前が戦闘にあまりでたくない気持ちもわかるが、お前は団長だ。そういうわけには、いかないのだよ？」

「…っ！！」

桔梗は翔をぎつと睨むと、さっそうと去っていた。

《バンツツ》

ドアの閉まった音だけが、虚しく響き渡った。

そして、明朝…

「桔梗？」

神威が心配そうな表情で桔梗に話し掛けた。

桔梗ははっとして、立ち上がった。

「ごめん…何？」

「ぼつとするなよ。着いたぜ？」

桔梗たちは、琥珀を出て3時間、徒歩で翡翠の塔の前まで来た。

今回の任務は、桔梗・神威・紅那・功卯・亥緒・姫優理の6人での出陣となった。

「んで、今回はどうやって攻めるんだ？」

神威が桔梗に聞いたずねた。

桔梗は、翡翠の塔の地図を広げると、目を瞑った。

敵の数は、さほど多くない

問題は、敵のレベル

団長・団長補佐・副官レベル

正面からいくか

裏からいくか

どのような戦法でいくか

「…正面からいくか…」

桔梗の答えに、功卯はにやっと笑みを浮かべる。

「賛成 正面突破いいね」

「下手に裏から攻めるよりか、いいかもしれないですね」

そういつて、紅那は短剣を鞘から抜いた。

姫優理は武器の円盤を両手でもち、胸に押し当てた。その手は、小刻みに震えていた。

そんな姫優理を見かねて、功卯が姫優理の隣に立ち姫優理の肩に手を乗せた。それに気がついた姫優理は、

功卯のほうへ顔を振り返らせた。

「平気だった」

「でも…」

「お前が心配することはないぜ」

そういつて、功卯は槍を手にする。

「桔梗、俺が前をいくぜ」

「…任せたわ」

「御意っっ」

「なんだ？警報か？」

門番の2人が顔を見合わせた瞬間、

「悪いな」

2人の間を“何か”が通った瞬間、2人は気絶し起き上がることはなかった。

功卯は右手に槍をもち、前へ進んでいった。

あとに続いて、桔梗・神威・亥緒・紅那・姫優理が走り抜けた。

功卯は前で、次々と敵をなぎ倒していく。桔梗たちは、ほとんど手を出さなくていいほどだ。

しかし、桔梗は不安で胸がいつぱいだった。予想以上に敵の数が少ないのだ。

「ハッ！雑魚ばかりだなっつー！！」

功卯が前へ進み続けるとき、亥緒がさつと左の方をみた。

(殺気……？)

気のせいかと思った次の瞬間、物陰から眼鏡をかけた青年が2丁の銃を向けていた。

「功卯っ！伏せろっつー！！」

亥緒は力いっぱい叫ぶと、ナイフを数本取り出し、物陰へと投げた。しかし、ナイフは何かにあたり跳ね返った。

亥緒の声に気がつき、とっさに功卯は伏せた。すると、さきほど功卯のいた場所に銃弾が通った。

「んなつ？！」

「バレバレだよっ！出てきなー！！」

亥緒は声をあげていう。

すると、物陰から眼鏡をかけた青年が現れた。

「残念…もう少し遅かったらよかったのにね…」
「訳わかんないこといってんじゃねえよ。悪いけど、僕…頭にきたからね」

そういって、亥緒は両手に紺色のグローブをはめた。

眼鏡の青年はクスツと笑みを浮かべた。

「何もわかってないのは、君らのほうじゃないかな…？」

「…何？」

亥緒が顔を歪めたとき、

《ガキンツツツ》

亥緒の隣で、金属と金属の交じり合う音が響き渡った。

隣では、目を包帯でおった女性の刀と神威の刀が交じり合っていた。

「ちいつ…」

「神威っ」

亥緒は右手を女性へ向かって振りかざした。

指先から、細い糸のようなものがでて、女性に降りかかるうとしていた。

とっさに女性は、神威の刀を弾いて後ろへ飛んだ。

糸は、女性を避けて地面へと落ちた瞬間、地面は何か落ちてきたように碎け散った。

「何者っ?!」

桔梗が2人に向かって声をあげた。

「鱗爛副官、蘭麻 朱薫」

「同じく灯閃 祈鎖」

「琥珀が副官、卯月 亥緒」

「琥珀団長補佐、相楽 神威だ」

名を名乗った後、沈黙が続いた。

風が吹きつけ、近くの木の葉が舞い散った。

1枚の葉が、ひらひらと地面へついた瞬間、

「……っ！」「……」

弾けるかのようにはじめ、祈鎖と神威が前へと出る。

刀を交わらせるときは姿がみえるものの、それ以外は2人の姿は目で確認することができなかった。そう、桔梗以外の人間には…

「ちっ…女のくせに、よくやることで」

「男女差別は、好まないのだが」

そういうと、祈鎖は左手をさつと振付ける。左手には、手に収まるほどの小さな銃が握られていた。

（ポケット・ピストルっ?!）

祈鎖は迷うことなく、引き金をひいた。

狙いもさだめずに、神威の肩へと銃弾はとんでいった。神威は刀で弾き返すと、距離をおいた。

「ちいっ…」

「神威さんっ」

紅那が神威のとなりにきて、短剣を祈鎖へと向ける。

「桔梗様のところについてってください。この人は、私にお任せください」

「何いってんだよ。こいつは…」

「桔梗様のお側についてあげてくださいっ!」

「…わかった」

そういって神威はさがり、紅那は祈鎖のほうを向くと笑みをこぼした。

「さ〜て、あたしがお相手ですよ?」

「…貴様ごときでは、相手にならないな」

「やってみなくちゃ、わからないわよ?」

そういうと、紅那は短剣をもって構えた。

祈鎖は銃口をむける。すると、

《ピュンツッ》

祈鎖の頬を“何か”がかすった。頬からは、かすかに血が流れ出した。

祈鎖は手の甲で血を拭った。頬は、冷え切ったように冷たかった。

「…それが、秘術というの何か…」

「ご名答よ。あたしの秘術の属性は、氷。その気になれば、天候だって変えられるわ」

「…いざ、勝負っっ」

祈鎖は刀を両手で握り締め、紅那へと立ち向かった。

「桔梗、先にいくぞ」

神威は桔梗のともに戻ると、せかすように言った。

桔梗は首をふるが、神威はキツイ口調で言う。

「ここで立ち止まってる暇はない。任務遂行のためにもっ」

「仲間を置いていけっつて言うの?! そんなの」

「できないとでもいのか?」

「っ?!」

桔梗はじつと神威を見つめる。

神威もまた、桔梗をじつと見つめた。

「わかってるだろ?ここは、戦場だ。そんな甘い言葉は通用しない。使える奴は使っつて、どんどん切り捨てていくんだ」

「そんなの…そんなのっ?!」

「桔梗っっ!!!」

桔梗の前にいた功卯は、怒鳴りつけるように桔梗へと言葉を発する。

「お前が動かなきゃ、何もはじまらないんだ!いくぞっっ!!!」

功卯は桔梗の腕を掴むと、無理やり桔梗を引っ張って塔の中へと入っつていった。

その後、神威・姫優理が続いて塔の中へと入っつていった。

「いいのかい？いかせて…」

朱薫は、亥緒へと言葉を発する。その手には、黒と白の銃が握られていた。

亥緒は、4人の行く姿を見送ると、朱薫へと顔を向ける。

「僕の仲間は、みんな強いので。心配することは、何もありません」

「そう強気でいられるのは、どれぐらいかな？」

「それは、こっちのセリフ」

そういうと、亥緒は朱薫を睨みつけた。緑色の瞳がじっと、狙った獲物を逃がさないというかのような鋭い目つきで朱薫を睨んでいる。朱薫は一瞬、怖気つきながらも銃を握る手の力を強めた。

「生憎だけど、君は僕には勝てないよ？」

「やってみなきゃわかんねえだろ…これでも、“俺”は強いぜ？」

緑色の瞳を輝かせて、亥緒は言う。

「この“秘術線”にかけて、全てを引き裂いてやる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386a/>

戦乱の旋律

2010年10月28日05時36分発行